

第29回 ポストモダン時代のジャズ

(9月5日 けやきホール)

世界各地の音楽にスポットをあて、演奏を交えて解説するJASRAC講座。今回は、音楽・映像評論家の相倉久人さんを講師に迎え、アメリカ合衆国の南部の街・ニューオーリンズで生まれたジャズの魅力を紹介。講座の様子は、ライブ動画配信サービス「ニコニコ生放送」と「ユーストリーム」で配信した。

第1部: 講義 <講師>相倉久人(音楽・映像評論家)

第2部: 演奏 <演奏>佐藤允彦(ジャズピアニスト/作・編曲家)

<総合コーディネーター>北中中和(音楽評論家・東京音楽大学非常勤講師)

<司会>ayako(制作プロジェクトHaLo主宰)



相倉さん(右)と北中氏

相倉久人さんは、大学在学中からジャズ評論を手掛けるかたわら、「新宿ピットイン」などで司会を務めるなど、ジャズの現場に深く関わり、現在は各地でトークショーなど多数の講演に出演している。第1部では、ワールドミュージックとしてのジャズについて、その歴史とともに紹介した。



■ジャズ誕生の背景

はじめに相倉さんは「アフリカから奴隷商人により連れてこられた黒人たちは、いったんカリブ海で売られ、その後、反乱を起こさないよう、言葉の通じない種族が混ぜ合わされ北アメリカに渡った。こうした雑居性がアメリカ文化を作っており、ジャズの背景ともなっている」と北アメリカの黒人奴隷のルーツを説明した。

■ジャズの起源

「ジャズはアメリカの黒人から始まった、とよく言われるが、純血の黒人ではなく、黒人と白人の混血(クレオール)が、フランス風の音楽を真似して始めたもの」。そのうえで相倉さんは「演奏者が黒人だ、白人だというのはなく、『文化として混血であること』を間違えるとジャズの歴史は理解できない」と述べた。

■ワールドミュージックの先駆け

「日本では戦後の占領政策の一環でジャズが広まり、日本人としては世界中に羽ばたいている音楽という大きなイメージをもっているが、ポップスや芸能としてみた場合、意外に小さい」。アメリカのポップス音楽は、行き詰まると原点であるカリブに戻り息を吹きかえす図式があり、この流れのなかで、黒人音楽の要素が加わり、ジャズがワールドミュージックになっていく。

■ポストモダン時代のジャズとは

西欧諸国は右肩上がりの成長を遂げてきたが、1970年代から限界が目に見えてくる。自信を喪失し、既存の価値観が混乱し始めて生まれた時代風潮が“ポストモダン”。「ジャズの世界も、共通の理解(コンセンサス)がなくなり、いろいろな価値観が乱立するようになった。あわせて、ジャンルを超えて多面的な才能を発揮する奏者も登場する」。相倉さんは、こうしたポストモダンの象徴としてアメリカのサクソ奏者ジョン・ゾーン氏を挙げるとともに、日本人では菊地成孔氏や大友良英氏の活動を紹介した。

第2部の演奏では、佐藤允彦さんが自身の曲『Solan』やディジー・ガレスピーの『A Night in Tunisia』などを演奏し、観客を魅了した。

佐藤さんはジャズについて「我々ミュージシャンにとって、即興演奏ができることが大きな条件。作曲やアレンジをするのは、自分なりのプレイグラウンドをつくり自ら楽しむため。年をとってもいっぱい遊びを作って楽しんで」と醍醐味を語った。



この講座の様子はホームページでストリーミング配信します(11月上旬公開予定)。ぜひご覧ください。

URL: <http://www.jasrac.or.jp/culture/stream.html>